

〔翻訳〕

メランヒトン『神学要覧』(1559年) —その6— (Loci praecipui theologici.1559) 翻訳

菱刈晃夫

国士舘大学初等教育学会編『初等教育論集』20号(2019年)に含まれる「その5」に引き続き、今回も「神について」の途中まで、ラテン語テキストからの試訳を掲載する。なお数字表記に関しては、縦書きでの全体出版が予定されているため、注番号等を除いて、漢数字を用いている。

(SA Bd. II-1. S.214-228)

* * *

こうした中傷的な腐敗〔聖書解釈〕は、人間的な事例に近づいているので、優美であるがゆえに不敬虔な性質の人々に喜ばれ、しばしば大きな墮落を引き寄せた。したがって確かな証言が集められねばならない。それは、ここでのロゴスが位格であると理解されなければならないことを示す。またヨハネによる陳述には主となる論争があり、それはロゴスがここで位格を意味するのかどうかというもので、ちょうど神によるカトリック教会が常に考え守ってきたことである。なぜなら当時、サモサタのパウロが騒動を起こしていたとき、年老いた司教〔長老〕が近隣の地区からアンティオキアにやってきた。彼は使徒の弟子に従い、サモサタのパウロを制し判決を下された者を、教会から追い出したからである。

こうした認識に至ったネオカエサリアの長老司教であるグレゴリウスであるが、そうした教えを、その時代の教会はもっとも純粋であると判断した。彼は記された信仰告白を、ニケア公会議よりずっと前に退けていた。この信仰告白はエウセビオスの書の七巻に残っている^{*1}。

*1 エウセビオス『教会史(下)』秦剛平訳、講談社学術文庫、二〇一〇年、一四九-一五九頁、参照。

一つの神、生きる言葉である父、留まり続ける知恵と自身の完全な像の完全無欠な産みの親、独り子として生まれた息子の父〔がある〕。ひとりから成るただ一人の主、父の像、力ある言葉、永遠からなる永遠の子〔がある〕、子を通じて現れた、神に実体を有する一つの聖霊、聖化する聖霊〔がある〕、これを通じて神は常にすべての上ですべての中で認識される。

したがって私はこの信仰告白を、古き純粋な教会の明晰な証言を含んでいるがゆえにというだけではなく、位格の違いを明確に述べているがゆえにも引用した。〔それは〕子は像であると述べている。〔それは〕聖霊は聖化するものであると述べている。これ〔聖霊〕を通じて神は知られるようになる。つまり、これ〔聖霊〕は心に新たな光を燃え立たせる。コリントの信徒への手紙二の三章で言われているように、「私たちは皆、主と同じかたちに変えられていきます。これは主の霊の働きによるのです」（二コリ三・一八）。

ところでヨハネの記述の中でロゴスは位格を意味しているということは、まずそれ自身の記述から明らかである。なぜなら後にヨハネはキリストについて語っているからである。「言は世にあった。世は言によって成った」（ヨハ一・一〇）。実際に世界がキリストの人性によってつくられたのではないことは確かである。ゆえに処女から生まれたキリストにおいては、父と共に創造する他の本性があらねばならず、またそうした本性が留まっていなければならない。

そういうわけで他の場所では同じような文言が、キリストには二つの本性があることを明らかにしている。コロサイの信徒への手紙一章に、「万物は御子において造られたからです。万物は御子によって、御子のために造られたのです」（コロ一・一六）。ヘブライ人への手紙一章に、「神は、御子を万物の相続者と定め、また、御子を通して世界を造られました。御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の現れであって、万物をその力ある言葉によって支えておられます」（ヘブ一・二以下）。こうした文言は、キリストの中に父と共に作り出す神性があり、そこに留まっていることを、はっきりと知らせている。それゆえにロゴスはキリストの外にある意図あるいは思考を意味するのでも、移り行く声でもなく、キリストの中に留まる本性を、父と共に作り出すもの〔父との共創造者としての本性〕を意味している。したがってロゴスは位格なのである。

そういうわけでヨハネの手紙でも言われていて、「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目を見たもの、よく見て、手で触れたもの、すなわち、命の言について」（一ヨハ一・一）。ここでもやはり処女から生まれたキリスト自身の中に、初めから存在した言葉があり、留まっていることが明らかにされている。後で複数の証言が同じことを示していて、それはキリストにおける神的な本性について語っている。ちょうど、「アブラハムが生まれる前から、私はある」（ヨハ八・五八）のように。

敬虔なる精神は、神について、それが自身を明らかにしたように信じられねばならないのを知っているが、そのとき〔この精神の持ち主たちは〕福音のこの証言が明白であることを見て、この見解はもっとも固く保持されねばならないことを認識する。すなわちキリストの中には神性があり、ロゴスはこの記述においては位格を意味しているということである。そしてこれらの証言の中で熟考する者は、神の子を願い求める〔神の子に祈る〕のである。

〔さて〕今は古い著述家による言説を調べてみよう。それはニケア公会議よりも前に生きていた人々であるが、彼らについてセルヴェは読者の目を不実にもくらませている。彼はエイレナイオスとテルトゥリアヌスから切り取られた一部の言説を引いて、あたかも彼らが、処女からキリストが誕生する以前に、ロゴスが位格あるいはヒュポスタシスではないと欲しているかのようにしているが、双方に対して明白な不正を行っている。なぜならテルトゥリアヌスは『プラクセアス反論』で、はっきりと次の問いを喚起しているからである。ロゴスは本性において自存するもの(*natura subsistens*)あるいは(今われわれが言うように)位格なのかどうか、と。そして位格あるいはヒュポスタシスである、と強調して答える。さらにこの見解を長く熱弁をふるって説明する。その中に次のような言葉がある。

「ゆえに言葉の実体が何であれ、それを私は位格と呼び、それに子という名を要求し、それを子と認め、父の後の第二の者と主張する」^{*2}。

エイレナイオスもまた公然と、人間の本性〔人性〕をとり入れる前、ロゴスが位格であったと主張している。なぜなら三巻二章で次のように述べているからである。「最初に神のところにはロゴスが存在していて、これを通じてすべてがつくられ、これは常に人類と共にいたということを、私ははっきりと示しておく。これを、父から前もって決められた時に従って最後のときに、その創造物、受苦しうる人間と一つにして、送ったのである」^{*3}。

オリゲネスもまた『諸原理について』で、ロゴスが位格であるとはっきりと主張している。「誰も〔次のように〕考えてはならない」と彼は言い、「私たちは神の知恵と呼ぶ場合、何か自存するものを持たないものについて話している」〔と考えてはならない〕^{*4} と。そして後に、「ゆえにもし一度正しくひとり子として

*2 『キリスト教教父著作集 13(テルトゥリアヌス 1— プラクセアス反論 パトリウムについて—)』 教文館、一九八七年、三〇頁、参照。

*3 『キリスト教教父著作集 3-I(エイレナイオス 3— 異端反駁 III—)』 教文館、一九九九年、九一頁、参照。

*4 オリゲネス『諸原理について』 小高毅訳、創文社、一九七八年、六二頁、参照。ここでの訳は「我々が彼を「神の知恵」と呼ぶ時、非実体的な何ものかを言っていると考えてはならない」。

生まれた神の子が、自存的に自存するその知恵であると受け止められれば」^{*5}と。受肉について説明するとき、同じことを後に彼は主張している。しかもっと明白なのは、ネオカエサリアのグレゴリウスとエイレナイオスによる証言であり、これは前に引用した。

しかし私はヨハネに戻る。彼がこう言うとき、「言は肉となって」（ヨハ一・一四）、まず父と言葉〔言・御言葉〕は同じ位格ではないと明らかにしている。なぜなら父は人性を身に付けたのではないからである。というのも自身を子から区別して、こう述べているから。「これは私の愛する子」（マタ三・一七）。次にこう言われるとき、「言は肉となって」（ヨハ一・一四）、位格が理解されねばならない。なぜなら前に明示したように、処女から生まれたキリストの中には神的で創造的な本性が留まっているからである。したがってロゴスは位格である。同じく、もしロゴスが父自身であって、単なる思考であるなら、この思考は肉とはならないはずである。なぜなら父は肉とはならないからであり、肉となりという過ぎ去る声から語られうるものでもないから。なぜなら〔それは〕過ぎ去り消え去るからである。だがロゴスは処女から生まれたキリストの中に留まるのである。

したがって処女マリアより生まれたキリストの中に、ロゴスと人性という二つの本性があって、このように一つとなり、結果としてキリストは一つの位格となる。というのも教会はこの合一という名称を用いたので、こうした話し方に私たちも従うからである。確かに昔の人々は折に触れて結合という名称を用いたが、これは慎重に理解されねばならず、本性の混合と思われてはならない。オリゲネスが、たとえこの結合に固有の類似が主張されうることを否定するにしても、それでも彼はこれを白熱した鉄と比較する。ちょうど火が鉄の中に入り込み、あらゆるところでこれと混ぜ合わされるように、同じく人性を引き受けたロゴスもまたその中で完全に輝き、そして人性は、あたかも燃えたとさせられた光によって、ロゴスと一つとされるのである。

十分に明らかに、私たちはサモサタのパウロ、フォティヌスそしてセルヴェの狂乱を撃退した。そのとき私たちはロゴスが位格と理解されねばならないことを明言した。次いでアリウスを論駁するのは容易である。彼はヨハネにおいてロゴスが位格を意味すると認めるが、しかし後にこの位格は神性ではないと争う。だがヨハネはもっとも強固にアリウスを反駁する。そのとき彼ははっきりとロゴスが神であり、神という名称において両義的〔曖昧〕なものはないと主張してロゴスを当てるが、それはこの位格によってすべてがつくられたからである。ゆえに創造し万能の位格があるがゆえに、これは真に本性より神なのであり、単なる名

*5 同前、参照。ここでの訳は「したがってひとたび、神のひとり子が実体的に実在する神の知恵たることが正しく認められたならば」。

称ではないのである。

さらにまたサモサタのパウロとアリウスという二人の論駁は、続く証言によって助けられる。これは処女から生まれたキリストの中に二つの本性があり、事物を創造する神性と人性が留まっているのを明示している。

ヨハネによる福音書二〇章でトマスはキリストを公然と神と呼び、こう述べている。「私の主、私の神よ」(ヨハ二〇・二八)。これはしばしば慣習的に使用されたヘブライ語の表現で言われていて、それによって固有の神の名が連結され、真の祈りが異邦人から区別される。詩編一九編にあるように、「しかし私たちは我らの神、主の名を誇る」(詩二〇・八)。それゆえにキリストに真の神の名を帰し、そこに単に人性があるのみならず、神性があることを認めるとき、トマスの中には驚くべき新たな光があったのである。ローマの信徒への手紙九章、「肉によればキリストも彼らから出られたのです。キリストは万物の上におられる方。神は永遠にほめたたえられる方」(ロマ九・五)。そして神という名がここで比喩的に用いられているとからかわない者には、証言が付加されるのであり、それは神性に固有のものをキリストに帰すもので、つまりそれにはつくりだし、死者を生き返らせ、聖化し、〔願いを〕聞き届け、永遠の生を与えといったものである。ヨハネによる福音書五章、「私の父は今もなお働いておられる。だから、私も働くのだ」(ヨハ五・一七)。父が行うこと、そして子も同様に行う。「父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、自分の望む者に命を与える」(ヨハ五・二一)。この語りの中で、キリストは自身が父と一つとなってつくりだし、被造物を保ち、教会を守り、死者を生き返らせる、と明確に主張しているが、これは何ら疑うところなく全能の本性に固有のものである。ヨハネによる福音書一〇章、「私は彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、また、彼らを私の手から奪う者はいない」(ヨハ一〇・二八)。ヨハネによる福音書一四章、「私の名によって願うことを何でもかなえてあげよう」(ヨハ一四・一三)。私たちが願い求めるものを聞き届け行うことを、彼はここで公然と明らかにしているが、それは両方とも神的で無限の本性に固有のものである。ヨハネによる福音書一五章、「私を離れては、あなたがたは何もできないからである」(ヨハ一五・五)。キリストはそこにおいて、保護し、助け、祈る者を導いていることを、この文は明らかにしている、それは神に固有のことである。マタイによる福音書一八章、「二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである」(マタイ一八・二〇)。どこにでもいて、どこでも願いを聞き届け助けることは、神性に固有のことである。ヨハネによる福音書二〇章、キリストは聖霊を与えるが(ヨハ二〇・二二)、それもまた神性にのみ固有のことである。ヨハネによる福音書一〇章、「私は命を再び受けるために、捨てる」(ヨハ一〇・一七)。ヨハネによる福音書六章、「私がその人を終わりの日に復活させる」(ヨハ六・四〇)。同

じく、「人の子が元いた所に上るのを見たら、どうなるのか」（ヨハ六・六二）。ヨハネによる福音書八章、「アブラハムが生まれる前から、私はある」（ヨハ八・五八）。ここでは人性をとり入れる前から自身がいたことを明らかにしている。ヨハネによる福音書一七章、「父よ、世が造られる前に、私が御もとで持っていた栄光で、今、御前に私を輝かせてください」（ヨハ一七・五）。コロサイの信徒への手紙一章、「万物は御子において造られたからです。万物は御子によって、万物は御子にあって成り立っています」（コロ一・一六以下）。ゆえにキリストの中には事物をつくりだす神性がある。そのため後に二章では、こう言われていて、「キリストの内には、満ち溢れる神性がことごとく、見える形をとって宿っており」（コロ二・九）と、まるでこう言うかのごとくである。他のものの中に神がその霊によって住まわれていて、新しい光と新しい情動〔心の動き〕を燃え立たせているが、しかしキリストの中には単に霊によってのみならず、ちょうど位格的に一つとなって、人性が神性と一つとなってあるかのようなのである、と。なぜなら私たちが今しばしば慣習的に使用して位格と言うように、古くギリシア人たちは身体(σώματα)と言ったからである。「神は御子を万物の相続者と定め、また、御子を通して世界を造られました。御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の現れであって、万物をその力ある言葉によって支えておられます」（ヘブ一・二以下）。使徒言行録七章、「主イエスよ、私の霊をお受けください」（使七・五九）。この嘆願を彼はキリストに帰した。死にゆく者の魂を見守り、魂と身体とを再び結合させるためである。テサロニケの信徒への手紙一の三章、「私たちの父なる神ご自身と私たちの主イエスが、私たちの道をあなたがたのところへとまっすぐに向けてくださいますように」（一テサ三・一一）。テサロニケの信徒への手紙二の二章、「私たちの主イエス・キリストご自身と、私たちの父なる神とが、あなたがたの心を励まし」（二テサ二・一六以下）。

旧約聖書から

Ex veteri Testamento

エレミヤ書三三章、「主は我らの義と呼ばれる」（エレ三三・一六）。ここで彼はキリストへ神に固有の名を帰して義認者であると断言している。ゆえにキリストへ神にのみふさわしい栄光を帰している。同じく義認し、罪と神の怒りを取り除き、義と永遠の命を与えるのは、神をおいて他には決してできない。しかしユダヤ人がたとえこの証言を巧みに嘲るにしても、それでも彼らへの反駁は容易である。預言者は明らかに彼がメシア〔救世主・キリスト〕と呼ばれねばならないと述べている。つまり、この信仰によって彼は願い求められねばならず、彼自身が神であり、私たちの義認者なのである。メシアという称号はこの位格そのもの

に関係している。イザヤ書七章、「その名をインマヌエルと呼ぶ」(イザ七・一四)。つまり神は私たちと共にいる。しかしよりはっきりと九章では続いて、「その名は驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君と呼ばれる」(イザ九・五)。ここでもユダヤ人は El [エル・神] という言葉を嘲るが、しかしこの言葉によって神が意味されているのは確かであり、彼らの偽りを、次に続くテキストそのものが反駁している。「永遠の〔命の〕父」(イザ九・五)。キリストはこの生の後にある永遠の命の権限者であり授与者であるから、次に言うように、「私は彼らに永遠の命を与える」(ヨハ一〇・二八)。彼の本性は神でなければならない。ミカ書五章、「その出自は古く、とこしえの昔に遡る」(ミカ五・一)。この証言は短いにもかかわらず、それでも世界がつくられる前からメシアがいたことを断言している。それゆえに彼〔イエス・キリストすなわちメシア〕は永遠であり神である。前に引いたヤコブの言葉が示すように、それゆえに父たちは彼を初めから知っていたし、彼が教会と共にいることも知っていた。そしてダニエルは彼と話し合い、ひどく恐れさせられて励まされ、新しい光と生命によって満たされた。そしてコリントの信徒への手紙一の一〇章では、砂漠の中に人々と共にいたと述べられている。「彼らが飲んだのは、自分たちに付いて来た霊の岩からでしたが、この岩こそキリストだったのです」(一コリ一〇・四)。詩編四五編、「王があなたの美しさを慕うなら、王はあなたの主人。彼の前にひれ伏すがよい」(詩四五・一二)。ここでは神に固有の名が王であるメシアに帰されている。そしてこれは甘美な約束である。たとえ教会が、この世の生でとてつもなく大きな苦難によって形を損なわれ、今まで無力であるにしても、それでも王であるメシアは教会を愛し、美しくあれと宣告している。この約束によって自身の無力に抵抗する敬虔なる精神は自らを保つのである。

詩編七五編はメシアが永遠であり、常に崇められねばならないと述べている。「王の名がとこしえに続き、その名が太陽のあるかぎり栄えますように」(詩七二・一七)。同じく「王が、太陽と月のあるかぎり、代々にわたってあなたを畏れますように」(詩七二・五)。礼拝は神性に帰せられている。すなわち絶え間ない礼拝について言われているのは確かであって、たとえ目に見えなくてもメシアが願い求められるのであり、ただ身振りについてのみ言われているのではなく、それによって今ここにいる王に栄誉が帰されることになる。同じところに永遠が記されている。「その名が太陽のあるかぎり栄えますように」(詩七二・一七)。つまり、太陽がつくられる前に、ここに子がいたということである。なぜならヘブライ語の詩編はここで顕著な言葉を用いて、疑いなしに、子が太陽の創造以前に生まれていることを意味しているからである。

詩編一一〇編、「主は、私の主に言われた」(詩一一〇・一)。そこからキリストが単にダビデの子であるだけでなく主でもあることを証している。さて同じ政

治的領域と同じ本性において、ちょうどアウグストゥスがユリウス・カエサルの主ではないように、子あるいは継承者は決して父の主あるいは王の祖父ではない。それゆえにメシアの王国は滅びる政体ではなく、永遠の生命であり永遠の義であるだろう。そしてキリストにおいては永遠の生命をもたらす神性があるであろう。ちょうど詩編の残りの部分が教えているように、それはすべて次のように把握されねばならない。「あなたは、とこしえの祭司」（詩一一〇・四）。彼は私たちに父へと導き永遠の命を与える絶えざる祭司であると述べている。「私の右に座れ」（詩一一〇・一）。つまり、永遠の父と同じ力で支配すべし、ということである。さて力は無限であるので、キリストの中には神性がなければならない。

詩編二編、「私は今日、あなたを生んだ」（詩二・七）。これはキリストのみに関して言われている。同じくヨハネからキリストは神のただ一人の子と呼ばれているが、つまり養子縁組によるのではなく息子の本性による、ということである。しかし彼は本性より息子であって、その中で父の実体(substantia patris)が〔挿し枝によって〕繁殖させられている。

そして誰かが、神性は苦しんだり、死んだりしないが、しかしキリストは死んだと非難されるなら、通常の、真の、必然的な答えは、こうである。なぜならキリストの中には二つの本性があって、ひとつの本性に固有のあるものが、他の本性があるのを妨げることはない。ところでこの人性に固有なものがあり、それは身体が損なわれたり、苦しめられたり、死んだりすることである。それゆえにペトロははっきりとキリストは肉では殺されたと言ったのである（一ペト三・一八参照）。そこでエイレナイオスは学識をもって敬虔に一八五頁で、こう述べている。キリストは言葉が休息している中で十字架につけられ死んだ〔十字架につけられ、死んだ時にはみことばが黙っていた^{*6}〕。結果として彼は十字架につけられて殺される。つまり神性は確かに苦しめられず死にもせず、キリストは父に従っていたのであり、安らいでいたのであり、人類の罪に対して永遠の父の怒りに従っていたのであり、自らの力を使うことはなく、自らの能力をむきだしにすることもなかったのである。もしあなたがエイレナイオスの言うことを考慮するなら、あなたは本性の区別が敬虔に説明されていて、同時に罪に対して神がキリストに注がれた怒りの大きさ、安らいだ子の謙遜への感嘆、父への服従、自身の力を行使しなかったことが描かれているのを理解するだろう。

ところでこの言説は、あのフィリピの信徒への手紙二章と符合している。「キリストは、神の形でありながら」（フィリ二・六）。つまり、父と同等の知恵と力は神の同等性を奪わなかった。つまり受難の中で神に従うために〔キリストが〕

*6 『キリスト教教父著作集 3-I (エイレナイオス 3— 異端反駁 III—)』 教文館、一九九九年、一〇一頁。

送られたとき、〔神による〕召命に対して何もせず、自らの召命に対して自らの力を用いることなく、自身を空にした。つまり自らの力を示すことをせず、僕の形をとることで自らを卑しめた。つまり人性と共に死を身に付けることで、そうした状態から人間としての発見をした。つまり感情、恐怖、悲しみ、苦痛によって。ゆえに本性の区別は保たれねばならないが、しかし同時にそれは位格の一体性により、こうした見解が真実であると理解されねばならない。神は苦しみを受け、十字架につけられ、死んだ。あなたたちは人性だけが贖い主であると考えてはならず、神の子のすべてであると考えてもならない。なぜなら、たとえ神性が損なわれることはないにせよ、死ぬことはないにせよ、それでも父と永遠に共存するこの子自身が贖い主であることを、あなたたちは正しく知るべきであるから。したがって属性の交流(*communicatio idiomatum*)に関するこうした教えには規則が伝えられている。つまり特質を公言することに関して、それは両方の本性に共通してであるが、しかし具体的に言われていて、すなわち位格に帰せられた特質が理解される、ということである。

敬虔な人々が調和のために教会と共に、学識ある根拠を欠くことなく、語るのに入念であるのは当然である。古い教会はあるやり方を承認し、あるやり方を退けた。しかし私たちは詭弁を弄しようとする欲求を避け、厳かな真の權威によって受け入れられた形を保ち続けるようにしよう。この見解は真ではない。神性は人間的なものである。しかしこれは真である。神は人であり、言葉は人であり、キリストは人であり、キリストは神であり、神は処女より生まれ、苦しみを受けた。なぜなら、この〔キリストの〕位格は、この中で人間の本性〔人性〕と神の本性〔神性〕が位格的に一つとなって結合されていて〔位格的結合〕、〔そうした状態で〕生まれ、十字架につけられたからである。こうした語りの形式を実際には属性の交流と呼んでいる。つまり預言〔告知〕であり、この中で本性の属性が位格に正しく帰せられ、そうして神の子は贖い主となるが、ただ人性だけが贖い主となるのではない。同じく、この見解は真であり受け入れられる。言葉は肉となり、言葉は人となり、神は人となり始めた。それに対して、この見解は一方で退けられる。言葉は被造物であり、キリストは被造物であり、キリストは存在し始め、キリストはつくられた。なぜなら賢明にも曖昧さから逃れられ、落とし穴が避けられるからである。というのもアレイオス派の人々はそのように語りながら、受け入れられたキリストの人性について話すことはなく、人に先立ってキリストの中に、ある他の本性が無からつくられ、父の実体から生まれた永遠の父の像ではなく、父と本質的に同じであり、永遠に共存すると強く主張したからである。

言葉は人である、というのは広く受け入れられている。なぜなら言葉が人性をとり入れたと理解されるからである。言葉は被造物である、というのは退けられ

る。なぜなら他の本性がとり入れられるとは理解されないからであり、預言はロゴスが被造物であることを意味することとなり、それは誤りであるからである。こうしたことを私は検討してきたが、それは熱心な学習者〔学生〕たちに、語る際には敬虔な精神にふさわしい細心の注意を払い、正統な教会の言葉がまねられる〔引き継がれる〕よう想起させる〔気づかせる〕ためである。

こうした答えは保ち続けられねばならない。ある言説は本質について語り、あるものは義務について語っている。アレイオス派の人々はこの言説を引用した。「父は私よりも偉大な方」(ヨハ一四・二八)。これは明らかに送る者と送られた者との違いについて語っていて、本質についてではない。すなわちユダヤ人たちがキリストを、神の権威に逆らって教えていると糾弾したとき、キリストは父の権威に申し立てねばならなかった。〔この〕父から自身は送られ、自身に教えが負わされ、教えることが委ねられたと〔キリストは〕断言する。そのうえで父はより偉大であり、あたかも送る者、教えの源泉、こうした教えと教会そのものを認め守る者、と言うのである。ここに送られた子は十字架を担い、教会は弱さで溢れるが、しかしキリストは父について叫ぶ。「父は私よりも偉大な方」(ヨハ一四・二八)。父は私と共に働き、この教えと自身の教会とを守る。

他の箇所ではこのように言われる。「父よ、御前に私を輝かせてください」(ヨハ一七・五)。この文言はアレイオス派の人々から他と同じく引用されうるが、しかし義務の区別を行っているのであり、本質について語っているのではない。今や私は送られて十字架の下にあり自己の召命に仕えている。次に世がつくられる前にあなたのところにあつた真の栄光を回復しなさい。それに対して、この文言が本質について語っている。ヨハネによる福音書一章、「初めに言があつた」(ヨハ一・一)。

こうした答えがしばしば場所を占めるが、これは確かに預言者において注目されねばならない。他の文言は支配するキリストについて語っている。「父がなされることは何でも、子もそのとおりにする」(ヨハ五・一九)。他の文言は卑しめられ苦しみを受けるキリストについて語っている。このように「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになつたのですか」(マタ二七・四六)。「これは」本質について言われているのではなく、その時間的な服従が記述されているのであって、この中で人類の罪に対する神の怒りを子に注ぎだしたのである。そして神の子は人性をすべて無傷のままとり入れたという原則は固持されねばならない。これは本性に固有な秩序づけられたあらゆる力と傾向〔欲求〕を備えている。同じく〔これは〕墮落してはいないが、それでもなお罪も死もなく受苦しうるものである。

〔キリストは〕そうした弱さを自発的に私たちのために引き受け、そうして犠牲となつたのである。ちょうどヘブライ人への手紙四章で言われているように、「この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪は犯されなかったが、

あらゆる点で同じように試練に遭われたのです」(ヘブ四・一五)。

それゆえに、たとえキリストが父を見て祝福された状態にあったにしても、それにもかかわらずその人性は自身の傾向性を持つが、しかし秩序づけられていたのである。そしてこうしたことはしばしば挙げられる。〔キリストは〕空腹で、喉が渇き、喜び、怒り、痛み、泣き、大きな悲しみによって打ちのめされる。自身がこう言うように、「私は死ぬほど苦しい」(マタ二六・三八)。そしてすべての者が経験するように、悲しみの中で心の動きが駆り立てるので、キリストの中でもそれほど大きな心の動きがあり、その結果として血液は押しだされて汗がまるで濃い滴りのようになり、固まった血のようであった。なぜなら *θρόμβοι* [固まって] というのがそれを意味している(ルカ二二・四四)。他の誰もそうした解決に耐えることはできなかった。キリストにおけるこうした情動はまねされないが、しかし真実で極めて激しい〔心の〕動きである。

私たちはキリストが石であったとか禁欲的であったとか考えるべきではない。そうではなく〔キリストは〕真に喜んだのであり、悲しみによって真に苦しめられたのである。そうした闘争の中での甚大な悲しみには理由があった。彼は身体が切り裂かれるのを恐れているだけではなく、より大きな重荷を感じている。つまり人類の罪に対する神の怒りである。ちょうど自分自身がすべての恐るべき不幸によって汚されているかのように、これが自身に注ぎだされ〔放たれて〕いるのを知っているのである。同じく彼はこうした神の恩恵を遠ざけることで、人類の大部分が滅ぼされてしまうのを嘆き悲しんだ。このような甚大な悲嘆は、私たちからは決して理解されえないし耐えられるものでもない。しかしそれでも教会がこうした事柄について何がしかを考えるのには必要である。それゆえに教会は十字架によって重荷を負わされたのであり、それは罪に対する神の怒りがいわば巨大であることを認識するためである。

それゆえに特別な怒りが子に注ぎだされたので、悲嘆は巨大なものとならざるをえなかった。これによって神が人類から怒らされているのを〔キリストは〕悲しみ、落胆による誘惑と戦ったのである。それゆえに彼を強めようと天使が送られた。こうしたことは、私たちがある程度そこから罪の巨大さを見積もりキリストに感謝するために、考慮されねばならない。キリストは私たちに対する罰を自らにとって代わり、同時に私たちのために哀願者〔赦しを求める者〕となったのである。こうしたことを考えることで、私たちは信仰、祈り、そして畏怖を惹起していこう。

しかし他方で、キリストにおける死からの逃走は不完全であったのではないかと議論している。なぜなら〔キリストの〕より弱い部分がより強い部分に従っていなかったからである。まず私は、肉における傷はもちろん罪なしにでも苦痛を自然に引き起こすと答える。同じく心と意志における何らかの悲嘆がある。これ

はキリストの中に過ちなしに〔罪なく〕あったのであり、彼は嘆き悲しんだが、しかし私たちのように、無秩序に(inordinate)ではなかった。

それから彼の自然の苦痛の上にキリストの中には人類の罪に対する神の怒りの感覚〔感情〕があり、神が人類の罪のゆえに真に恐ろしく怒らされているのを認識し痛み苦しんでいる。そして落胆による誘惑に抵抗する。したがってこの戦いにおいて何らかの動揺があるにせよ、というのも一般的に自然本性は力を超えるものを負わせられてうめくからであるが、それでもこの慄きあるいはこの苦惱は、キリストにおけるのと他の人間におけるのとは異なる。キリストは神に向かい憤慨することなく恐れを甘受し、父に従わねばならないことを認める。それゆえに、この慄きは罪なくあるのであり過失ではない。しかしその他の人間においては逃走と共に神の判断に対する不平があり、キリストの勝利に救いを求めることへ苦勞して進まない者たちにおいては、恐るべき冒瀆が続いて生ずる。私はただ長く議論を加えようとは思わない。なぜなら敬虔な者たちはこうしたことを考えようとして自身の苦難〔勞苦〕を導くからである。それでも私たちが注意を促されることは有用である。そして詩編や預言者の中には似たような戦いの比喩が、ある程度こうしたことを明らかにしている。

しかしながら彼らはこの闘争について幸福だと言うがゆえに、卓越した喜びの中にある間、同時に大きな動揺の中にあることはないので、他の時期のようにかの至福の栄光が〔際立って〕輝いていないような受難の確かな時間があったかどうか、答えられねばならない。すなわちこの殉教のために確定された時期があったのである。この中でキリストはまさに犠牲となり、言葉は沈黙し、エイレナイオスが言う通りである^{*7}。こうした時期の区別でもって私たちは満足させられるとしよう。他の者は他の回答を求めるが、その判断については読者に任せることにする。

(次に続く)

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 22K00110 の助成を受けたものです。

(ひしかり てるお・教授)

*7 『キリスト教教父著作集 3-I (エイレナイオス 3— 異端反駁 III—)』 教文館、一九九九年、一〇一頁、参照。